

Title	第1章 昭和55年度京都大学構内遺跡調査の大略
Author(s)	樋口, 隆康; 亀井, 節夫; 川上, 貢; 清水, 芳裕
Citation	京都大学構内遺跡調査研究年報 The Annual Report of the Center for Archaeological Operations (1981), 1980: 1-4
Issue Date	1981-09-16
URL	http://hdl.handle.net/2433/227342
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

第1章 昭和55年度京都大学構内遺跡調査の大略

樋口隆康 亀井節夫
川上 貢 清水芳裕

1 調査の概要

京都大学埋蔵文化財研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営その他の掘削工事に関する報告に基づいて、埋蔵文化財関係の調査を既知の遺跡との関係や過去の調査結果をもとに試掘、発掘、立合にわけてそれぞれ調査を行なった。

昭和55年度には以下の26件を実施した。

試掘調査	工学部建築学教室新営予定地（本部構内A Z 30区）	（第5章，図版1-71）
	和進会館移転予定地（病院東構内A K 18区）	（第5章，図版1-72）
	吉田食堂新営予定地（教養部構内A P 22区）	（第5章，図版1-73）
	医学部特殊R I 実習室新営予定地（医学部構内A L 20区）	（第5章，図版1-83）
	教養部構内実験排水槽設置予定地（教養部構内A O 21区）	（第5章，図版1-84）
	医学部構内実験排水槽設置予定地（医学部構内A L 17区）	（第5章，図版1-85）
	病院東構内給水管埋設予定地（病院東構内A K 16区）	（第5章，図版1-86）
	病院西構内給水センター設置予定地（病院西構内A G 14区）	（第5章，図版1-87）
	内科総合病棟新営予定地（病院西構内A J 17区）	（第5章，図版1-88）
	国際交流会館新営予定地（京都市左京区山端老丁田町）	（表6）
発掘調査	本部構内実験排水槽設置予定地（本部構内A T 27区）	（第4章，図版1-75・89）
	工学部電気系学科校舎新営予定地（本部構内A X 28区）	（整理中，図版1-90）
	農学部附属牧場施設新営予定地（京都府船井郡丹波町）	（整理中，第1章）
	教養部構内実験排水槽設置予定地（教養部構内A O 21区）	（整理中，図版1-91）
立合調査	理学部物理学学科校舎機械設備工事（理学部構内B G 30区）	（表6，図版1-92）
	楽友会館煙突工事（教養部構内A M 22区）	（第5章，図版1-93）
	医学部総合解剖センター新営予定地（医学部構内A Q 20区）	（表6，図版1-94）
	構内基幹整備給水管埋設工事（全構内）	（第5章，図版1-95）
	構内基幹整備電気管理設工事（本部構内）	（第5章，図版1-96）
	構内基幹整備ガス管理設工事（北部構内，病院構内）	（表6，図版1-97）
	構内実験排水管路埋設工事（本部構内）	（第5章，図版1-98）
	構内基幹整備通信施設埋設工事（本部構内）	（第5章，図版1-99）
	放射性同位元素総合センター設備工事（北部構内B F 29区）	（表6，図版1-100）
	理学部極低温研究室ヘリウムガス回収工事（北部構内）	（表6，図版1-101）
	農学部農林生物学科温室新営工事（北部構内B G 37区）	（整理中，図版1-102）
資料整理	医学部総合解剖センター新営予定地（医学部構内A P 19区）	（第3章，図版1-74）

なお、工学部電気系学科校舎新営予定地の発掘調査は、昭和53年度工学部イオン工学実験施設新営に伴う調査にひきつづいて行なったものである。また、本部構内実験排水槽設置予定地の発掘調査では、奈良時代の竪穴住居跡2棟と12世紀の土壙墓が発見された。これらの遺構は京都府下では例が少なく、関係当局に対して保存の要請を行なった。その結果、保存部分については施設位置の変更を行なうことになり、ひきつづいて隣接する代替地の調査を行なった。第4章では、この1次、2次両調査の成果をまとめて報告する。本部構内では、これらの調査に加えて、本年度広範囲に行なわれた埋設管工事に伴う立合調査が進み、縄文土器の出土を確認するなど遺跡の状況をかなり詳しく把握することができるようになった(第5章)。

また京都府船井郡丹波町所在の農学部附属牧場については、昭和53年度の立合調査で遺物の出土は認められなかったが、今年度、中小家畜舎等の建設に伴ない、周辺に群集墳が分布することも考慮して再度立合調査を行なった。その結果、建設予定地の一部に遺物包含層が分布していることを確認したため、農学部、施設部と協議の結果、建築工事を一時中断して発掘調査を実施することとなった。さらに理学部附属瀬戸臨海実験所では、腕を組んだ座像の土偶が採集された(図版2)。すでに昭和51年度以後の調査によって、縄文後期・晩期の土器、埋葬人骨が出土しており〔京大調査会77, 京大埋文研78a・80〕、今回の発見によって遺跡の内容がさらに充実した形で理解されることになった。

2 土師器の時期区分と年代表記

京都大学構内の遺跡調査では、本年報を創刊した昭和51年度以降、遺物や遺構の年代表記は時代区分(平安, 鎌倉, 室町)と西暦年代とを併用してきたが、病院構内A E15区, A F14区出土遺物の整理過程で、遺物とくに土師器の編年研究を進め、新たな時期区分が行なえるようになった。今年度から遺構、層位出土の一括資料については、これにもとづいて年代を表記することにしたので、その時期区分の概略を示しておく〔京大埋文研81〕。土師器は大きな変化で大別すると、平安～室町時代を8期に分けることができる(表1)。また、それぞれの時期を少なくとも3小期(古, 中, 新)に区分することが可能である。これら8期と3小期の実年代を決定できる資料として、良好な遺物を出土した例をあげることができる。まず、平城上皇没年(824年)に下限をもつ平城京S E311B様式の土師器〔奈文研62〕が平安京Ⅰ期古段階にあたり、寛治5(1091)年5月13日の墨書をもつ須恵器鉢が出土した平安京四条一坊S E-8出土の土師器〔平安京調査会75〕は平安京Ⅲ期新段階に相当する。また、天文1(1532)年に焼亡したとされる山科寺内町第2号石室出土の土師器は、中世京

表1 土師器時期区分の大略 縮尺 1/5
『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』より

時代区分		土師器の時期区分	土師器の代表的な杯・皿・椀		
八〇〇 九〇〇 一〇〇〇 一一〇〇 一二〇〇 一三〇〇 一四〇〇 一五〇〇	前期	平安京Ⅰ期			
	平安時代	中期	平安京Ⅱ期		
		後期	平安京Ⅲ期		
	鎌倉時代	前期	平安京Ⅳ期		
		後期	中世京都Ⅰ期		
室町時代	前期	中世京都Ⅱ期			
	後期	中世京都Ⅲ期			
後期	中世京都Ⅳ期				

都Ⅳ期中段階にあたる。このほかに、実年代を決定するにはやや弱いものであるが、次の4例がある。平安京左兵衛府跡SD4出土の8世紀末～9世紀初頭とされている「主馬」墨書土器〔平尾78〕は、平安京Ⅰ期古段階のうちでも古いものである。同遺跡SD1出土の墨書土器は平安京Ⅱ期中段階のもので、墨書の書体は10世紀中葉ごろと考えられている。平安京左京内膳町SK18で乾元大宝(956年初鑄)4枚と共伴する土師器〔京都府教委80〕は平安京Ⅱ期末～平安京Ⅲ期初とすることができる。さらに同遺跡SE176下層の火災に遭った土師器は平安京Ⅳ期古段階にあたる。この井戸は中層が洪水層からなっている。文献上、康治2(1143)年土御門内裏浸水、大治5(1130)年と久安4(1148)年の焼亡の記事があり、古い方の焼亡記事にあたる可能性が強いとしている〔京都府教委80 pp. 192・193〕。これによって平安京Ⅰ～Ⅳ期は各期がほぼ100年であると考えられる。また中世京都Ⅰ～Ⅳ期に関して、京大病院構内における遺跡の盛衰と文献史料とを比較した結果、各期はほぼ3等分できるものと考えている。⁽¹⁾

このような土師器による時期区分は、現在の編年では細かいものの1つであり、遺構から多量にかつ普遍的に出土して廃棄までの期間が短いという点で、土師器の時期区分によって遺構および層位の年代を表記することは有効である。今後各期の古、中、新の3小期は、さらに細分することが可能であり、また各小期の土師器と他の種類の土器、陶器の共伴関係を明らかにするとともに、さらに精確な実年代を与える作業を進めているところである。

遺物の種類と器種の分類基準については、昭和54年度年報までに述べてきたとおりであり、ここでは省略する。さらに土師器に関しては、口縁部形態、調整手法の特徴や器種構成および法量の変化から上記のような時期区分を設定し、また遺構出土の良好な一括資料については、他の陶磁器類との共伴関係を量的な面から捉えるため、個体数算定の方法として口縁部計測法〔宇野81 p. 61〕を用いることにした。このようにして、土師器にもとづく時期の細分を進めるとともに、各小期における遺物の種類、器種について量的な分析を行ないつつ、消費地における出土量の比率から生活様式の復原をも試みている。

〔注〕

- 1 京都大学文学部助手宇野隆夫氏から多くの御教示をいただいた。